

二枚貝類に対するチャネルキャットフィッシュ *Ictalurus punctatus* による捕食の影響について

萩原富司

地球・人間環境フォーラム，土浦の自然を守る会

カラスガイ類、ドブガイ類、シジミ類などの二枚貝類は、タナゴ類などの産卵床として利用されるほか、ろ過食生物として水質浄化に寄与するなど、水界生態系の重要な構成員となっている。またイケチョウガイ類やシジミ類は、淡水真珠生産、食材として生態系サービスを提供している。しかし治水・利水を目的とした河口堰の建設による、富栄養化の進行、人工護岸建設に伴う生息域の消失や、農薬による直接・間接影響を受け、減少の一途をたどっている(萩原ほか、2017)。さらに大陸産コイやアオウオなど貝食魚類の人為的導入などの影響も無視できない。

1971年以降、食材利用を目的として利根川上流域に導入されたチャネルキャットフィッシュ(丸山、1987)は霞ヶ浦の環境に適応して増殖しており、周辺の食文化にまで影響を及ぼしている(松崎ほか、2011)。本種は魚類、貝類を含む底生動物、昆虫、陸上植物片を食べる雑食性であり(平山ほか、2018)、湖岸でしばしば死魚を捕食する光景がみられるように腐肉食者でもある。霞ヶ浦においては本種の二枚貝類捕食の影響については未解明であるが、二枚貝類が減少した現在では影響は無視し得ない。そこで、淡水真珠養殖業者、漁協の協力を得て、霞ヶ浦・利根川の重要な水産生物である、ヒレイケチョウガイ交雑種、ヤマトシジミに対する影響について調査を開始したので、その一部を報告する。

淡水真珠養殖に利用されるヒレイケチョウガイ交雑種は、垂下したパールネット内では入水管と取水管を上、足を下に向けて定位している。通常二枚貝類は潜砂するため貝殻の外に足を出している。チャネルキャットフィッシュの摂食により、足の変形、真珠核の飛び出しなどの被害が生じている。そこで真珠取り出し時期の貝について足の食害状況を調査した。その結果養殖貝の84%以上に食害が認められた。また、利根川下流地域ではかつてヤマトシジミの大産地であったが、河口堰の建設以降激減して現在は資源回復に努めている。この汽水域にチャネルキャットフィッシュが侵入して、本種の消化管内からヤマトシジミの殻が出てくるという。そこでヤマトシジミの世代構成を調べた結果、新規加入の稚貝は認められるものの殻長15~30mmの中型貝がほとんど見られず、それ以上の大型貝だけが認められる歪な世代構成となっており、中型貝が捕食されている可能性が示唆された。これらの水域にはアオウオ、コイ、

ニゴイ、アカエイ、クロダイなどの貝の捕食魚も存在するため、今後チャンネルキャットフィッシュの寄与率を定量化する必要がある。